

東西文明の比較 (8)

陽光新聞社・顧問

塩澤宏宣

今から1万年以上前から2千年前までの縄文時代、日本列島にはどのくらいの間(縄文人)が住んでいたのでしょうか。大変興味のあるテーマだと思います。

このテーマにはいくつかの説がありますが、一番有力な説は26万人くらい(縄文中期:約3000年前)というのが有力だそうです。この数値は、現在までに発見された縄文遺跡の数、居住地、集落規模などから推計されたものです。その内訳は東日本で25万人、西日本はわずか1万人ということです。

では、平均寿命はどのくらいだったのでしょうか。残された骨から年齢を推定できますが、平均寿命を計算するには乳幼児の死亡年齢を計る必要があります。日本列島のほとんどが酸性土壌であるため、乳幼児の小さな骨がほとんど残っていません。つい最近まで、日本でも乳幼児の死亡率は高かったことを考えれば、この時代の乳幼児の死亡率は相当高かったでしょう。

人口学の分野では、7歳まで育つと後は無事に成長するといわれており、15歳まで育てば、その人は「プラス16歳」という研究結果があるそうです。この理論を当てはめると、縄文人の平均寿命は20歳程度ですが、15歳まで無事に育った人については、男性が31.1歳、女性が31.6歳の寿命であるとされています。

縄文人の死生観とはどういうものだったのか

縄文時代特有な遺物として土偶があります。土偶は、人物や動物をかたどっていますが、縄文時代の早期から存在しています。人物の土偶はすべて

女性像です。乳房のほか、腹部を膨らませた妊婦を思わせる像は、現代アートをもしのぐ魅力があります。

では、このような土偶を何の目的で作ったのでしょうか。その解は3つあるそうです。

その一は「豊穡・多産を願う地母神」であるという説。旧石器時代のユーラシア大陸でも、ヴィーナス像が作られており、誕生の神秘からくる再生・豊穡の観念は、共通する物があります。

その二は「疾病・傷害などの災禍を転嫁するための呪物」説。土偶は「身代わり」として作られたとするものです。各地から発掘された土偶のほとんどすべてが完全な形をとどめていません。どこかが破損しているのです。おそらく意識的に一部を壊して埋めたのでしょう。

その三は「死者の再生を願った祭祀」という説。土偶は、母なる女性・子を宿す女性・子を育てる女性を意味し、懐胎—死—再生—誕生、という「輪廻観」に基づいた祭祀に使用されたといわれています。破損部分は、その再生を願ったのでしょうか。どの説が正しいかは定まっていらないようですが、それらがすべて包含されているという気がします。

土偶は、一種のよみがえりのための儀式に使われたのではないかと思います。

祈りと祭りのはじまり

超自然で不可解なことを解消し、さまざまな願いを成就するために、縄文の人々は祈りを捧げました。縄文人の自然へ向かう態度は、「森羅万象・万物に生命や精霊が宿る」と考えて神格化したことです。また、人と同等な生き物にも畏敬の念を抱き、その心を静めて災いを避けるために祈ったのです。そして、祈りを表現するために、日を決めて儀礼を行うのが祭りです。命日などを周期的に行う儀礼もその範疇といえます。このような心は、今も日本人にも残っているのではないのでしょうか。

祈りの対象は「カミ」または土偶でした。「カミ」

とは、心の中に存在する崇拜心や宗教心だったのです。あえて「カミ」としたのは特定宗教のそれと区別するためです。自然界の持つ「自然の力」をいいます。

環状列石とはなにか

現代でいえば共同墓地です。縄文人は、石には霊が宿り、配石はあの世とこの世を分ける役割を持っていると信じていました。

環状列石は、長径30～40メートルの角を丸くした方形に配石した墓地です。相撲の土俵のように外帯と内帯(丸い部分)に石を配置し、その下部に墓穴を掘ってあります。血縁・地縁を持つ氏族の連合が、結びつきを強くするために造営した「祭りの場」ではないかといわれています。

その成立は縄文中期ごろ、東北太平洋側だといわれます。いまだ階層の分化はなく、手厚く葬る風習がなかった時代であったため、個人ではなく集団の結束に重心をおいていたようです。

この環状列石は、日本の墓石の源流ともいえるのではないのでしょうか。また、イギリスや北欧にあるストーンサークル^注の兄弟か、と考えると夢が膨らみます。

縄文後期(2000年前)の後半からは環状列石がすたれ、土坑墓群という集団墓地になります。これらの共同墓地は、やがて20～30基の家族墓地へと変わっていきます。同時に故人が愛用したと思える装身具などの副葬品が添えられたケースが異常に高くなります。集団より「家族・個人重視」という価値観に変化してきたのでしょう。

ここで話題をちょっと変えてみます。

縄文時代の時代区分は、土器の形態分類を基準に決めています。しかし、本のページをめくるように時代が変わってきたわけではありません。再三ふれますが、縄文人のルーツはシベリアからオホーツク海を渡ってきた人たちと、長江流域から南西諸島・九州ルートがありました。

最近、富山県の小竹貝塚から91体の人骨が発見されました。縄文時代早期(6000年前)のもので、それら人骨をDNAで鑑定したところ、蒙古、ロシアシベリア型とタイ・マレーシア型そして台湾型があったそうです。日本人が二つのルートから渡来した証拠が明確になったようです。

この南北二つのルートから来た人々が、日本列島で出会ったのが中部東海地方ですが、そのときは何語で会話をしたのでしょうか。

文字も筆記具もない時代のことですから答えは永遠に出てこないと思いますが、古代人がどうやって会話し、経験を後世に伝えたのか、想像するだけでワクワクします。

以前、2015年11月号で「タミル人と日本人」を載せていただきました。その内容は「日本語のルーツはタミル語である」という大野晋先生の説を紹介した記事です。

そこで今回は、高島俊男先生の「漢字と日本人」から。「日本語のルーツはない。日本語は地球上どこにも親戚のいない孤立無縁の言葉である」となります。ルーツのない言語は、ほかにもたくさんあるようです。一番有名なのがフランスとスペインに挟まれたバスク地方の「バスク語」です。ちなみに漢語は「支那西藏語族」、英語は「印欧語族」というヨーロッパ全域からアジア西部にまたがる世界最大の語族の一員です。

今私たちは、縄文人とひとくくりにはしていますが1万3千年前のこの地、日本列島は想像できないくらい変化しているように思います。しかし、縄文時代を勉強すればするほど、現在の日本人の中に「縄文」が生きている(残っている)ようです。

今回はそんなことをテーマにしてみたいと思います。

■注：世界最古のストーンサークルは1990年代にフランス・ブルニケル洞窟で発見されたネアンデルタール人が作ったもの、とされています。